

〔桃山・江戸前期の美術展によせて〕

伝俵屋宗達筆「耕作図屏風」をめぐる

俵屋宗達は大和絵の古画から学んだ図様をもとに、王朝風俗や武家風俗を数多く描いています。一方で、宗達は遊女や歌舞伎者の姿など、当時、流行していた同時代の風俗図はあまり描いていません。宗達作品として伝えられる風俗図には、農作業に務める人々を描く耕作図が上げられます。耕作図には従来から2件の作品が知られています。一つはホノルル美術館に所蔵される六曲一双の「耕作図屏風」です。縦が約60cm、横が約150cmの小屏風に、右隻には農夫たちが田を耕す場面、左隻には農婦が田植えをする場面を描き、各隻に「法橋宗達」の落款と「対青軒」朱文大円印が認められます。

もう一つは『古香今色』第一号（昭和31年 水戸忠発行）に掲載された「田かへしの屏風」です。同書には三井家に伝来した作品と記されています。六曲一双の屏風であり、各隻の寸法はホノルル美術館の作品より一回り大きく、縦が約82cm、横が約266cmです。背景を省略した画面に、牛と馬で田を耕す二人の農夫を大きく表現し、鴉の群れと初夏に咲く薔と桜草を描き加えています。この作品にも「法橋宗達」の落款と「対青軒」朱文大円印が認められます。尾形光琳は宗達作品を数多く模写していますが、この作品の農夫と草花を抜き出し、六曲一隻の金地屏風に描いた光琳作品がフリア美術館に所蔵されています。

ホノルル美術館の作品と『古香

今色』に掲載された作品に加えて、近年、もう一件の耕作図が再発見されました。縦が約156cm、横が約175cmの二曲一隻の屏風、「耕作図屏風」（図1）です。襖の引手金具を嵌めていたような跡が認められますので、一時期、襖に改装されていたと思われる。この作品は『尚美資料』第四編第五輯に京都市在住の湯浅七左衛門氏の所蔵作品として収録されています。『尚美資料』は六輯を一編に編集した豪華な画集です。第一編第一輯が大正二年一月、第一〇編第六輯が大正七年一月の発行ですから、第四編第五輯は大正三年の後半から大正四年の前半に発行されたと思われます。ただし、同書に掲載された作品名は「伝光琳筆、耕作図二枚折屏風」です。作品解説では、光琳筆という伝承について、「光琳筆と伝ふと雖も、筆者は宗達を慕うて、その風骨を得たるに近し」と記しており、宗達作品を学んだ作品と考えていることがわかります。

「耕作図屏風」では、土手の向こうに広がる田を高い視点から俯瞰的に捉え、畦によって三場面に区画しています。第一場面は画面の下中央に牛に犁を牽かせて土を起す農夫、第二場面は左上の水を牽いた田に膝まで浸かり、鋤と鍬で耕す二人の農夫、そして、第三場面は右上の田植えをする三

人の農婦です。農夫たちの図様はホノルル美術館の作品に近く、大きなスケールで描かれた人物表現に重点が置かれています。最も注目されるのは動勢の表現です。第一場面では、伸び上がるように犁を牽く牛と、引きずられまいとする農夫（図2）の間に大きな力の均衡が図られています。農夫の手足の表現や顔と手の大きなプロポーションは、宗達の代表作として知られる「風神雷神図屏風」（建仁寺蔵）の雷神（図3）を思わせます。第二場面の二人の農夫は足を踏ん張って鋤を突き立て、鍬を振り下ろして懸命に田を耕しています。髭を生やす年長の農夫が鍬をしっかりと握る両手（図4）は、「風神雷神図屏風」の雷神の撥を握る両手を見るようです。雷神の特色ある姿勢には、耕作図のように、現実的な動作を示す人物を描いた成果が反映されているのでしょうか。「耕作図屏風」は「風神雷神図屏風」の動勢表現を理解する上でも興味深い作品です。第一場面と第二場面の農夫の遅さとは対照的に、第三場面の農婦たちの体は、ふくよかに柔らかに表現されています。三人の農婦たちは一列に並び、前には、既に植え終えた苗の列が長く続いています。それぞれ、左手に苗の束を持って右手で植えており、三人の手つきをわずかに変えて、苗を植える一連の動作を伝えています。この場面では、田植えに精を出す農婦のおおらかで健康的な女性美が表現されています。宗達作品では、「伊勢物語図色紙第五十八段・長岡里」（図5）に、稲を刈り取る三人の農婦が描かれています。伊勢物語に取材し、このように農婦を描く作品は他に例

がありません。宗達作品と伝えられる「伊勢物語図色紙」では、「伊勢物語図色紙第六段・芥川」の雷神のように、しばしば伝統的な作品には見られない図様が描かれることがあります。雷神と同様に、農婦の姿も宗達が得意にしていたと思われる。「耕作図屏風」の図様の成立は、「風神雷神図屏風」や「伊勢物語図色紙」よりも先行していた可能性があります。

「耕作図屏風」では、土起こし、耕作、田植えと画面の下から農作業の順を追って描かれています。農夫たちの周囲には十分な空間が与えられ、適度な間隔を置いて描かれることで、それぞれの動きを生き生きと伝えています。その生動感には「舞楽図屏風」（醍醐寺蔵）の舞人たちの舞に通じます。しかし、三つの農作業を描いた画面は、現実の光景をそのまま写しなとは思えません。このような光景は、各地の神社で豊作を祈願して行われる御田植祭や田遊の行事を想起させます。これらの行事では、理想的な耕作過程が模倣的に演じられます。「耕作図屏風」には、農作業に従事する男女の姿が賛美されていますが、単なる風俗図ではなく、御田植祭や田遊の神事と関係の深い作品と思われます。（中部義隆）※図2は『日本美術絵画全集14 俵屋宗達』（集英社、1976年）より複写いたしました。

図4



図5



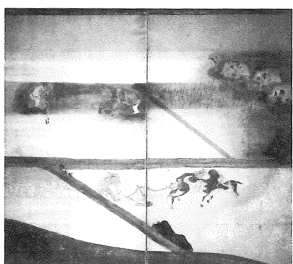
図2



図3



図1



季刊 美のたより No.180

平成24年 10月7日

発行 大和文華館